

“Meanings” and “Concepts” in the Study of Terms

KAGEURA Kyo

Abstract

Most researchers seem to recognize the importance of “concepts” in the study of terms. However, little has been clarified about the theoretical status of “concepts” with respect to the study of terms, except for rather ideological statements. Against this background, the author tries to clarify the status of “concepts” in the study of terms, in comparison with the status of meaning in semantic studies of language. It is concluded that “concepts” must be understood as a category of discourse, and, based on this, a framework of the theoretical study of terms is proposed.

1 はじめに

専門用語の理論的研究（中でもとりわけ「専門用語学」を主張する立場）のほとんどで、「概念」の役割が強調されてきた。けれども、実際にはその理論的位置づけは明確とは言いがたい状況にある。本稿では、専門用語研究におけるこれまでの「概念」の位置づけ、定義、構成などを整理し問題点を明らかにする。それをふまえ、専門用語の理論的な研究の可能な枠組みを考慮しながら、「概念」の適切な位置づけを考える。

2 専門用語研究における「概念」

専門用語研究における「概念」への言及は、概念の位置づけという前提的な点に関わるもの、概念の定義に関するもの、そして概念の体系や構造に関するものに区別できる。

概念の位置づけに関する典型的な主張は、次のように要約できる。すなわち、(1) 概念は用語とは独立に用語に先行して存在し、(2) この概念を表わしているところに専門用語の専門用語たるゆえんがある。こうして、(3) 「概念」の研究は、それ自体が専門用語研究の一つであると見做されるばかりか、それにより専門用語研究が独自のものとして成り立つ、専門用語研究の基本的理論装置とされる。

概念の位置が確保されると、次に概念の定義付けが行なわれる。ほとんどの場合、概念は、「心理的な構築物」(ISO 704 (1987))、「対象の心理的表象」(Felber (1984))、「人間の認知過程の構成物」(Sager (1990))などのように、心理的なものとして定義される。

次に概念の体系が問題となる。これに関する議論は多いが、具体的な分析を始めとする多くの場合では、概念カテゴリーを（必要十分な）概念特徴の束として構成しようとする心理学で言う「古典的モデル」が、概念の体系化のモデルとして採用される。

3 専門用語学的「概念」の問題

このように「概念」は、専門用語研究の理論装置として特権的役割を与えられており、概念を巡る重要な研究も多い。けれども、定義や具体的カテゴリーにおいても、理論的位置づけとしても、きちんと検討するならば、「概念」は専門用語研究の有効な理論装置となりえていないことがわかる。この点を以下で整理しよう。

3.1 実体的に見た「概念」と「意味」

始めに定義を検討すると、「概念」を「心理的な構成物」とする立場は専門用語学固有のものではない。心理学でも、言語学でも、人工知能関係でも、心理的な構成物としての「概念」を扱うことは少なくない。それらの研究領域においては、専門用語が表わすようなもののみでなく、一般的な「概念」が用いられる。けれども、専門用語学における「概念」の定義は、これらの領域における「概念」の定義と何ら異なっていない。

次に、実体的な概念分類などを見ると、専門用語研究では、いかにも「専門概念」的なものがあるが、一般概念と実質的に同じであるものも多い。さらに、ここで、言語学的観点からは「概念」とはっきりと区別されてこなかった「意味」の分類と重なってくる。これは、概念カテゴリーと概念特徴に対する意味分類と意味素性の同型性という形式的側面においても、具体的分析の産物としての分類体系においても言える。

3.2 理論的位置づけにおける「概念」と「意味」

もちろん、これらは今のところ大きな問題ではない。いずれにせよ、「意味」と「概念」はその本質において異なっているのだから、同じように見えるのは偶然だと主張できる。また、一般概念と専門概念については、専門領域の固有性を意識して取り込めばよい。

けれども、ここでさらなる問題を指摘することができる。すなわち、専門用語の説明のために特権的に使われている「概念」が、理論的位置づけとしては、言語要素一般の説明において対応する部分で用いられる「意味」と、全面的に対応しているという点である。

例えば、確定した専門用語集合の概念による体系化と一定の語彙の意味による体系化とを比較すると、そこにおける「概念」と「意味」の理論的位置づけの相違はなく、単に用語が違うに過ぎない。また、湯本(1979)のような「意味」レベルでの一般語の語形成研究と、Pugh(1984)のような「概念」レベルでの専門用語の語形成研究は、記述形式上全く同一である。前者が言語学的な語の研究で他方が専門用語の研究であるのは、単に前者が一般語を扱い後者が専門用語を扱っているからに過ぎない。影浦(1993)は、意味と概念の位置づけの差異を語形成記述の形式に反映しようとしているがうまく行っていない。

3.3 「概念」を巡る問題の整理

以上の問題点とその帰結を整理しよう。実体的なレベルで専門用語に関わる「概念」と一般概念そして「意味」とが識別不能であるのみでなく、その理論的位置づけも研究の記述形式も一般語の研究においてと同じならば、「意味」と「概念」は同義語となる。両者が同義ならば、「概念」に依拠する専門用語研究の独自性は存在しなくなる。ここに至って両者の定義が異なるというのは、教条主義的主張に過ぎない。

もちろん、専門用語学と称する研究領域の独自性が失われること自体はそう問題ではない。より重要なのは、専門用語に関わる諸現象を巡る「概念」に依拠した研究が、専門用語の理論となっているのか、たまたま専門用語を対象としただけの一般語の研究なのか、それ自体としては区別不能になるという点にある。すなわち、今のままでは、専門用語研究の

結果そのものの内に、対象とした専門用語の特徴がどのように把握されているかは不明であると結論しなくてはならず、この点を明らかにするためには、別途、対応する一般語研究と対比するといったことが必要とされることになってしまう。

4 「概念」再考

それでは、「概念」を持ち出すことがそもそも幻想にすぎないのであろうか。そうではない。國廣(1980)の議論や、専門用語を対象とした多くの研究における専門概念などは、「概念」を持ち出すことが、少なくともある程度は、理論的に「意味」とは異なるものであり、一般語と対置される専門用語の特質を理論的に反映しうる可能性を示唆しているように思われる。そこで、「概念」を、専門用語研究の道具だとして改めて正当に位置づける必要がある。そのためには、すでに専門用語研究において位置づけの自明なものと捉えて「概念」の定義や体系を考えるのではなく、専門用語研究における「概念」の正当な位置づけを、「概念」も含めた専門用語研究の理論構成とともに考えなくてはならない。

4.1 言語事実としての専門用語と言説のカテゴリーとしての概念

まず、「概念」と「専門用語」の規定を巡る考察から始めよう。専門用語研究における問題は、「専門用語」の規定が、もっぱら「概念」によってのみなされながら、その「概念」が「意味」と本質的に区別できないところにある。

「専門用語」であることの必要十分条件を「概念」との関連にのみ求めることは、「概念」に対する過剰期待であろう。これにより言語単位としての「専門用語」の位置づけが問われなくなる。実際、語や句のうち「概念」を表わすものが「専門用語」であると言われるときに、「語や句」が、言語体系の要素を指す場合と言語事実の要素を指す場合とがあり、一方、専門用語は「専門用語」としてはあくまでも言語事実においてのみ認められる要素であることであるといったことが見落とされてしまう。

ここで必要なのは、まず、「概念」を言説のカテゴリーとして言語事実の層に位置づけ、「概念」と「専門用語」ではなく、「概念」と言語事実の組が、「意味」と言語体系に対置されることを明確にすることである。専門概念は、専門的言説のカテゴリーとなる。

4.2 専門用語研究における概念の位置づけ

「概念」の実体的な規定において、言語体系および言語事実に対応した、言語のカテゴリーとしての「意味」と言説のカテゴリーとしての「概念」とを区別した。けれども、専門用語研究の理論構成にこうした区別が反映されない限り、この規定は、再び単なる言葉の変更が終わってしまう。それゆえ、ここで、専門用語の研究における「概念」の理論的位置づけを整理しよう。

まず、専門用語は、言語体系の単位として、一般語と共通の規則に従う部分がある。例えば、語構成の側面を見るならば、文法範疇レベルでの結合規則や、「意味」レベルでの要素の結合規則などである。「一般概念」と「意味」の区別がここで残されているが、言語的アプローチにおいては、前者が、総体的な言語事実の公約部分として、特定の言説に中立的である限り、それは言語体系における「意味」に還元可能と考えてよい。一方で、特定領域の言説の中に「専門概念」との関連で位置づけられる「非専門的概念」を想定することはありえよう。

次に、「概念」との関連で専門用語の研究を進める層が来る。ここで、専門的言説のカテ

ゴリーとしての「概念」は、専門用語の「専門」性の基準にはなるが、専門「用語」性の基準とはなりえないことが問題となる。単に現在ある用語の体系化や整理が目的でなく、例えば専門用語形成の理論を求める場合には、専門概念の可能性の中で、どの概念構成が専門用語となりうるか把握する必要があるだろう。このときには、専門概念を、それを表わす言語要素の位置づけとの関連で考慮する必要が出てくるであろう。専門用語研究において、「概念」を先行する心理的構築物としてでなく言説のカテゴリーと位置づけたことが、こうした可能性を理論的に保証することになっている。

5 おわりに

以上、本稿では、中立的な「概念」体系に専門用語をあてはめる作業だけでなく、専門用語の専門用語としての性質を把握しようとするをも目標とするという当然のことを専門用語の研究に含めるために必要な、「概念」を中心とする理論装置の位置づけの一つの可能性を示してきた。結局のところ、これまで「思考のカテゴリー」としての「概念」による一元的な専門用語現象の記述においては、一般的言語要素との差異としてしか評価できなかった専門用語の性質の問題を、積極的に専門用語現象の記述の層として内的に取り込むことにより、それ自体の中で専門用語性を把握できる研究の枠組みを提案したということになる。

結果として、出発点からこの作業を逆照射してみるならば、専門用語の理論的研究を、再び広義の言語学的な枠組みの中に位置づけたことになる。むろん、実際の専門用語データを対象としたときに現われる「意味」と「概念」に関する具体的な問題をこれで解決できるわけではない。けれども、少なくとも、専門用語において何をどう認めることが何を記述することになるのかといった点に対する見通しは、ここで整理したような枠組みによって、得られるであろう。

参考文献

- Felber, H. (1984) *Terminology Manual*. Paris, Unesco and Infoterm.
- ISO 704 (1987) *Principles and Methods of Terminology*. Geneva, ISO.
- 影浦 峯 (1993) 「複合専門用語の語形成傾向 — 情報学的観点から —」 語彙・辞書研究会 第4回研究発表会 (1993年11月27日).
- 國廣哲弥 (1980) 「意味の構造と概念の世界」『言語の構造』(講座言語第1巻) 大修館.
- Pugh, J. M. (1984) *A Contrastive Conceptual Analysis and Classification of Complex Noun Terms in English, French and Spanish*. PhD Thesis, University of Manchester.
- Sager, J. C. (1990) *A Practical Course in Terminology Processing*. Amsterdam, John Benjamins.
- 湯本昭南 (1979) 「あわせ名詞の構造 — n + n タイプの和語名詞の場合 —」『言語の研究』 むぎ書房.